

特別寄稿—海外河川事情レポート③—

荒川での自然再生の取り組みを第4回世界水フォーラム(メキシコ)で紹介しました

国土交通省 関東地方整備局 荒川上流河川事務所
所長 今村 能之 (前ユネスコ派遣専門家)

1. はじめに

水が国連の優先課題とされていなかった90年代半ばに世界水フォーラムを提唱したのはNGOである世界水会議 (World Water Council; WWC) であり、閣僚級会議が合わせて開催されるようになった第2回世界水フォーラム以降もNGOや市民は大きな役割を果たしてきました。

とはいえ、個別の取り組みにおいては利害が衝突し、「市民と行政の連携」がキーとされていながらもうまくいっている事例は実際にはそれほど多くありませんでした。

そのような中、前号でその概要を簡単に述べたブースへの出展を含め、第4回世界水フォーラムにおいて荒川上流河川事務所と荒川流域ネットワークが行った活動は、まさに世界水フォーラムの特徴である「連携・協働」を具体的に示したものとして注目を集めました。今号においてはこの視点から詳しくご紹介します。

2. 第4回世界水フォーラムにおける荒川上流河川事務所・荒川流域ネットワークによる情報発信活動

2.1 展示ブースでの情報発信

ジャパンパビリオンに設置された展示ブースにおいて、7枚の大型パネル展示とパンフレット配布による活動紹介を行いました。また、この機会に、来場者に対するアンケートを実施しました。



写真-1 展示ブース

配布を行ったパンフレットは、荒川上流河川事務所ならびに荒川流域ネットワークの事業や活動を紹介するものとし、それぞれ英語版、スペイン語版を用意しました。

会場では、荒川流域ネットワークのメンバーが現地語学スタッフの支援を受けて、パネルやパンフレットに基づいた説明を行いました。

荒川における流域管理、自然再生の取り組み内容に加え、政府と市民団体が協力して展示を行っていることに見られる「行政と市民との連携」に対して大きな関心が寄せられました。

アンケート中の「最も関心のあるパネルは何であったか」という質問に対し、その回答が一番多かったのは、荒川における自然再生事業全体を説明した「荒川エコロジカルネットワーク」のパネルでした。

これは、「自然再生」というテーマの新しさと、それを進めるための「行政と市民との連携」という体制に対して注目が集まった結果であると考えられます。

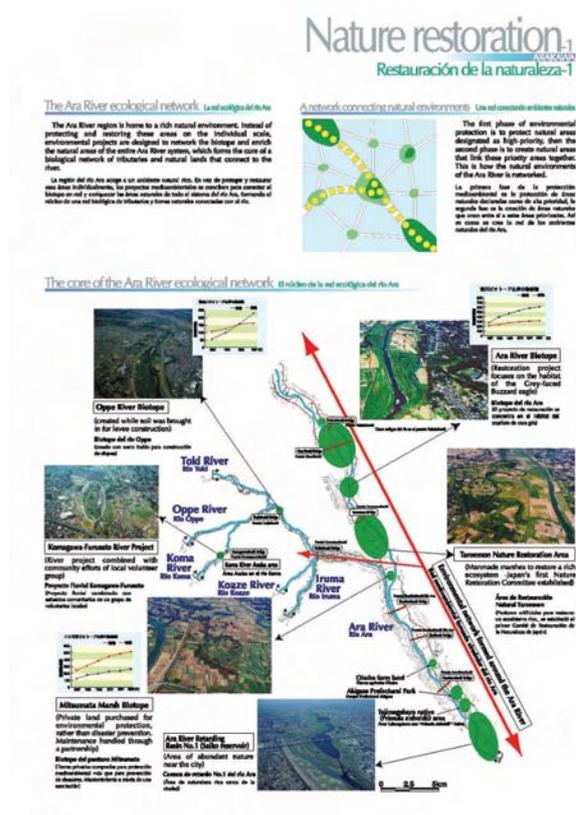


図-1 展示パネル 自然再生事業 (全体)

荒川太郎右衛門地区自然再生事業

荒川の河口から約54キロに位置する太郎右衛門橋より下流4キロ区間について、荒川の旧流路を中心とした地区で自然再生の取り組みが行われています。荒川太郎右衛門地区では、豊かな生態系を取り戻すために、日本初となる多様な主体が参加する「自然再生協議会」が設置され、河川管理者だけでなく、関係自治体、市民団体、地元住民などが協力し、本地区の自然環境の保全・再生に向けた取り組みを行っています。

2. 2 アンケートの実施

荒川での川づくりが海外の方からどのように見られるかを知るために現地においてアンケートを実施し、59名から回答が得られました。

荒川での川づくり、特に河川環境の保全と再生を評価し、「自国でも見習いたい」という意見が多く寄せられました。以下に主な結果を紹介します。

1) 回答者のプロフィール

居住国はメキシコ人が44名と70%以上を占め、ラテンアメリカ全体で85%に達しました。そのうち8割近くは男性でした。また、年齢は20～40代がほとんどを占めました。

所属を見ると、回答者のうち44%が政府関係者であり、その次に学生が19%、企業関係者が12%、NGO関係者が10%と続きました。第4回世界水フォーラムは、第3回に比べてNGOの参加が少なかったといわれていますが、民間企業、学生を含めた非政府関係者が約4割を占める結果となりました。

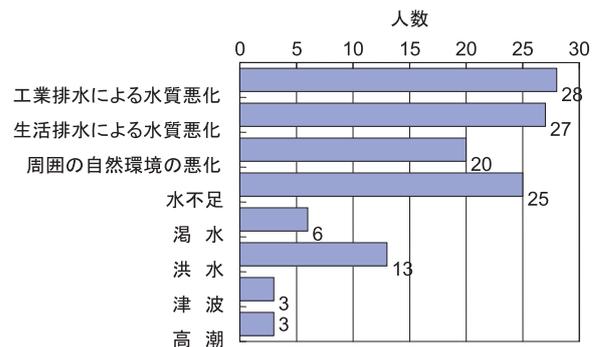
表一 1 回答者プロフィール

性別（無効回答：1名）	
男性	46名
女性	12名
年齢（無効回答：2名）	
10代	2名
20代	15名
30代	16名
40代	18名
50代	6名
所属（無効回答：5名）	
政府機関	26名
学生	11名
民間企業	7名
NGO	6名
その他	4名

2) 最寄りの川が抱える水問題

「最寄りの川が抱える水問題は何か」という質問に対しては、メキシコ人の回答者が多かったことを反映してか、水質汚濁や環境破壊といった環境問題、水不足や渇水という水資源問題についての回答が多かったことが特徴です。

また、これらの問題に次いで回答が多かったのは洪水を中心とした水災害であり、これには2005年のハリケーン・カトリーナも影響していると考えられます。

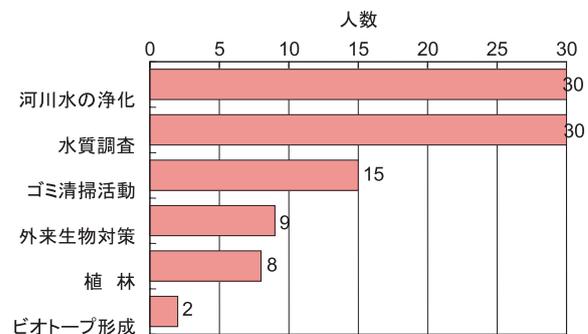


図一 2 最寄りの川が抱える水問題（複数回答）

3) 河川環境の保全・再生について

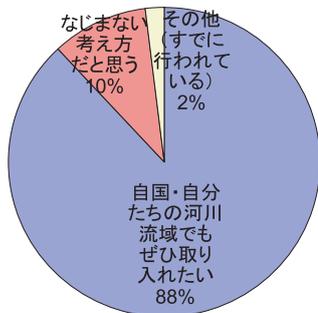
「河川管理における『河川環境の保全・再生』という考え方、あるいは具体的な取り組みについて知っていましたか」という質問に対しては、「知っていた」と答えた人が8割（48人中40人）を超えました。一方、実際に行っている『河川環境の保全・再生』活動としては、浄化活動や水質調査など河川の水質に関わるものが多くあげられました。

このことから、メキシコを中心とする地域では自国の河川水質の悪化に起因して環境に対する意識が高まってきているものと推察されます。



図一 3 河川環境保全・再生のために実施している取り組み（複数回答）

「荒川における河川環境の保全・再生についてどう思いますか」という質問に対しては、9割近くの人が「自国・自分たちの河川流域でもぜひ取り入れたい」と答えており、このことから荒川での環境保全や再生の取り組みが高い評価を受けたものと考えられます。



図一 4 荒川における河川環境の保全・再生について

「あなたの国・最寄りの川では河川空間を市民が利用していますか。利用されている場合は具体的にどのように利用されていますか」という質問に対しては、「利用されていない」と答えた人の数が約3分の1にのぼります。水質汚濁を主な水問題として挙げた回答者が多かったことと併せて考えると、環境保全が進まない限り市民による河川の利用が難しいという状態を示しているといえるのではないのでしょうか。

4) 自由回答からの抜粋

自由回答として率直に感じたことをあげてもらったのですが、驚いたことに好評的な意見ばかりで批判的な意見はありませんでした。

今回の展示により、来場者が河川再生や河川環境保全といった取り組みについての理解を深めることができたことを示すような回答も多く、日本の取り組みが先進的であり、多くの人の関心を集めた有意義な展示であったと評価されます。

自由回答

- 経験豊かで親切だった (墨)
- 日本の河川再生の手段・方法が大変印象的だった (墨)
- 住民参加が素晴らしい (墨)
- 節水文化が印象的 (墨)
- 河川の環境保全は大切 (墨)

- 河川再生と浄化は大切だ (墨)
 - 自分の河川環境保全意識が大変高まった (墨)
 - 多くの水災害を被りながらも克服し先へ進む日本はすごい (墨)
 - 展示が印象的だった (墨)
 - ウェブサイトの英語版を持つべき (墨)
 - 青少年への啓発が必要 (墨)
 - 村落での活動が重要 (パ)
 - いい仕事していますね (墨)
 - 河川に関する日本の法令に驚いた (ア)
 - 地域開発、政府の行動が大切 (墨)
 - メキシコでも実施すべきプロジェクトだ (墨)
- ※墨：メキシコ、パ：パラグアイ、ア：アルゼンチン

3. 荒川流域ネットワークによる活動

荒川流域ネットワークは、国土交通省荒川上流河川事務所による日本パビリオンへの出展ブースの説明支援、子どもフォーラムでのワークショップの開催、さらにジャパンプラザでのプレゼンテーションという3つの活動を第4回世界水フォーラムで行いました。

子どもフォーラムのワークショップとして実施したパックテストでは、6ヶ国の子どもたちがパックテストによる水質調査を体験し、生活排水が水中の生き物に与えている影響について理解を深めました。ジュースを飲んだ後のカップに水を満たした一見きれいな水も、CODの測定値が100mg/リットル以上になることに子どもたちは一様に驚きを示しました。一方で、引率の大人からは、パックテストの活用方法や今回測定したCOD以外にどのような検査項目があるかなどの質問が寄せられました。

また、パックテストはブースでも実施しました。



写真一 2 子どもフォーラムでのパックテスト

プレゼンテーションや展示ブースでの説明では、なぜ行政と市民が連携し始めたのか、どのように荒川太郎右衛門地区自然再生協議会を進めているのか、といった質問を多く受けました。また、エルサルバドルの活動家や国際協力機構（JICA）からニカラグアに派遣されている方からは、小中学生や先生たちに環境教育や水質調査の課題を伝えて欲しい、という要望も多く出されました。

日本では、1997年の法改正により、治水、利水に加え、環境が河川法の主目的に加えられました。事業の計画、立案、実施においては市民の参画が位置づけられたことが大きなポイントの一つにあげられること、それとともに市民団体もただ単に公共事業に反対をしてそれを阻止するのではなく、環境配慮型の計画にしていくためのアイデアをきちんと提案できるだけの情報と知識を収集・蓄積することによって参画できるようになってきていること、といった説明が行われました。



写真-3 ジャパンプラザでのプレゼンテーション

「荒川流域ネットワーク」とは荒川流域ネットワークは、1995年5月に開催された「河川環境についての懇談会」の終了後、そのとき参加した23団体を中心に設立が決定されました（2002年3月より特定非営利活動法人化）。その使命は以下の5つです。

1. 母なる荒川に清流を蘇らせよう！
2. あなたの家も水源地（家庭排水、雨水貯留）運動の展開
3. 絶滅危惧種ミズガキ復活キャンペーンの実施
4. 木遣い文化の再生
5. エコ・プライドを持って流域経営・国土保全を！

ネットワークに参加している流域の団体と個人が総力をあげて、荒川やその支川の水辺への

関心から流域の発想でその資源を知り、活かし、行政や税による対応だけではなく、流域コミュニティの一員としての市民・企業・行政が連携協働して、流域のヒト・モノ・カネ・情報という資源循環の再生を目指しています。エコロジカル（生態学的自然環境）にも、エコノミカル（経済的なメカニズム再生）にも流域環境を支えるというプライドをエコ・プライドと称し、その醸成を基礎に市民が境界を越えて、源流から海までの流域経営に関心を持ち、具体的な働きかけの行動を起こすことによって国土保全につながろうというものです。

※ウェブサイト <http://www.ara-river-net.jp/>

また、日本水フォーラムがウェブサイトを利用して発信した「第4回世界水フォーラム速報」を通じて、日本国内に対する情報発信を期間中随時行いました。



図-5 「第4回世界水フォーラム速報」サイト画面

今回により、荒川で実施されているような市民と行政の連携による取り組みを各国に広げていくためには、日本の事情や社会的背景を第一に説明し、理解してもらうことによって、各国の制度的な枠組みの整備から始めてもらうことが重要であると考えられます。

また、今回の発信に対する反響から、重要であるとわかっていてもなかなかうまくいかない市民と行政の連携を、日本の荒川から具体的な事例として発信できたことは非常に有意義であったと思います。

参 考

- 1) 日本水フォーラムウェブサイト（第4回世界水フォーラム速報）、<http://waterforum.blog57.fc2.com/>
- 2) 国土交通省荒川上流河川事務所ウェブサイト、<http://www.ktr.mlit.go.jp/arajo/>